

## 扉を開けると朝風が吹き込んだ

牧師 山本 護

礼拝時の「三密」を避けるためには、何よりも窓を開けての換気か。まだ寒かったのでストーブにどンドン薪をくべて窓を全開にし、それから礼拝堂の扉を開きました。すると朝風がふわぁと吹き込んで、堂内に沈殿していた空気を押し出していました。新型コロナウイルスは呼吸器系の病を引き起こし、その感染を避けるためには風が吹き抜けることが要諦だとか。



朝風がサインボードに留められた各方面からのお知らせを揺らし、ふと沖縄教区報の「道しるべ」が目にとまりました。ああ、米軍やヤマトの政府に挫かれぬ「ヌチドゥタカラ」の沖縄へ行きたい。専制に傾斜した我が日本基督教団を整えることのできる沖縄教区を訪ねたい。気がつかぬうちに、こもりがちになっていた感覚が、朝の冷風にそっと呼び覚まされて駄句ひとつ。「あさかぜといふ軍艦もあり菜の花も」。

幾度も語って来ましたが「霊、風、息」は、旧約聖書のヘブライ語(ruah)でも新約聖書のギリシア語(pneuma)でも一つの言葉です。エゼキエル書の「ruah」、新共同訳では「霊」ですが、口語訳では「息」、文語訳では「氣息」と訳出されています。

「人の子よ、息に預言せよ、息に預言して言え。主なる神はこう言われる。息よ、四方から吹いて来て、この殺された者たちの上に吹き、彼らを生かせ(エゼキエル 37:9 口語訳)」。あえて「風よ、四方から吹いて～」としても妙訳かもしれません。

息の病には、窓を開けての風で応じます。民主主義の形式をまとった専制的な風には、キリストの霊が吹き抜けることを祈ります。ヤマトの政府にも、我が教団にも。まもなくペンテコステ、霊の息をとりわけ覚えたい。コロナウィルスという自然界の息に、人の子はどんな預言をするのでしょうか(37:9)。おそらくその預言は、私たちを推し進める風ではないか、と予感しています。Ω